

ベルクソンにおける「自由」について

——『試論』から『物質と記憶』への変遷における「自由」論⁽¹⁾——

金子大智

1. 要約

本稿の目的は、フランスの哲学者アンリ＝ルイ・ベルクソン（1859–1941）の「自由」論を特徴づけることである。それは以下の手順で行われる。初めに、ベルクソンの自由論を主題とする二本の論文を取り上げ、ベルクソンの「自由論」の概観を捉える。一方は、ベルクソンが「自由」を主題とした彼の初の主著である『意識に直接与えられたものについての試論』（以下『試論』）を内在的に論じた論文（西山，2013）である。他方は、『試論』の次の主著である『物質と記憶』での議論を中心に、その次の著作である『創造的進化』までも射程に入れたベルクソンの「自由」論を論じた論文（平井，2012）である。ベルクソンの各主著の時系列上の順序を経て「自由」論は変遷を遂げているであろうが、『試論』から『創造的進化』に至るまでどのように変遷しているのかという内実を見ることが必要である。西山（2013）においては、『試論』における記述を解釈し、最初期のベルクソンの「自由」論を描出している。『物質と記憶』においては、「過去実在論」という彼独特の形而上学的テーゼにもとづいて哲学史上のハードプロブレムである心身問題の解決が図られたが、そこにおける記憶理論を参照し、『創造的進化』における生命一般の進化の創造性をも射程に入れ、時間と自由の関係を考察したのが平井（2012）である。西山（2013）では『試論』の範囲内での「自由」論が示される。平井（2012）では、『物質と記憶』の記憶理論を軸に『創造的進化』までも踏まえた「自由」論が示されるが、前者における（一つの完結した著作ゆえの）残された問題を後者の自由論によって補完できることが本稿において示される（それは『試論』から『創造的進化』へと至る過程がベルクソンの「自由」論の深化であることが内実を持って示されることでもある）。このような概観をふまえ、ベルクソンの「自由」論のさらなる問題を提示する。

2. 心理学的水準における「自由」——西山晃生の『試論』における「自由」解釈(1)

ベルクソンが著作で自由を明確に主題としたのは『試論』においてである。この著作でベルクソンは、時間と空間という形而上学的対象の徹底的な区別のもとで、科学における決定論の根拠となる前者に基づく心理学つまり連合主義的心理学や、決定論と選択の自由

という形而上学的議論における自由をめぐる議論を批判した。ベルクソンによれば、これらはすべて人間の自由を否定するものとしてその誤謬を正さねばならないのである。その際の批判および自由に関する記述は、心理学的観点つまり「意識の証言」⁽²⁾の正確さを基準にして行われている。ただし、この第一の著作以降、『物質と記憶』、『創造的進化』という二つの主著においては、(当時の)生理学・神経学・心理学・生物学的知見を踏まえ、心身問題や進化を形而上学⁽³⁾的観点で議論している。そこでなされる議論に基づいて、「自由」も議論されている。つまり、ベルクソンは「自由」を主題として掲げて以降、形而上学的水準へと自身の哲学的議論を推移させて自身の「自由」論を補強してきたということである。したがって、ベルクソンにおける「自由」の議論は、この二つの観点それぞれの水準における「自由」はどのようなものであるか、またこの二つの水準の関係はどのようなものであるか、という議論が肝要である。今節ではまず心理学的水準におけるベルクソンの「自由」を概観するが、そのために西山(2013)の論文を取り上げる。

導入部分において、『試論』の章立ての構成について述べたベルクソンの発言(DI, viii)が取り上げられる。全三章構成において、「自由」の結論が第三章であり、第一章「強度」概念の議論、第二章「持続」概念の議論各々は結論の第三章の導入である。従って、「意識や人格、あるいは内面」(西山(2013, 92 頁))と密接に関連する「強度」や「持続」そのものだけでは「自由」を特徴づけるのは不十分である。それは外的行為である「…行動そのもののあるニュアンスあるいは質のうちに求められるべき」(DI, p. 137) ものである。その質及びニュアンスとは「内的状態の外的な現われ」(DI, p. 137) という観点で考えられる。つまり、ベルクソンにおける「自由」とはその現われの形態すなわち「具体的自我とその自我がなす行為との関係」(DI, p. 165) において問われるべきものである。また、この議論において正しさの根拠となるのは、行為と物理現象を決定的に区別できない「外部に身を置く観察者」(DI, p. 113)ではなく、いわば「内部に身を置く」行為の当事者である。この行為遂行者である我々人間の「意識の証言」がどれくらい事象を正確にとらえているのかという正確さの水準で「自由」の正しさが争われるのである。以上より、ベルクソンの『試論』における「自由」は、意識などの内面のみに位置づけられるものではなく、その表れとしての行為における質に位置づけられ、さらにその正しさはわれわれの「意識の証言」の正確さに求めなければならない、ということになる。つまりベルクソンは『試論』においては「自由」を「心理学的水準」で議論しているということである⁽⁴⁾。

4. 「自由」をめぐる議論の誤謬—西山晃生の『試論』における「自由」解釈(2)

以上のように、導入において『試論』における「自由」は（さしあたり）形而上学的水準ではなくあくまで心理学的水準においてなされたと定められた。結論を除く残りの節において、具体的に心理学的水準での意識のあり方が詳論されるが、そこでの主題は「意識の証言」の正しさはどのように区別されるのかということである。そこで問題となるのは、「空間」の「意識」への関与が問題となっている。「空間」は、われわれが数を数えたり、事物を表象したり、他者とともに交流するための必要条件である。空間は、分割されても等質であり、従って無限分割が可能であり、さらに自身の構成要素として無限の部分の諸空間を持つことができるので、「諸対象の区別を保ったまま並置する仕組み」（西山, 2013, 93 頁）としてわれわれが生きていくうえで利便性を与えてくれるものである。つまり、空間によってわれわれは等質な単位の演算としての数え上げ、観念や知覚における事物の表象、一つの共通領域としての公共空間内での社会生活を円滑に遂行できるのである。このような有用でわれわれの生にとって必要不可欠な「空間」が、その利便性ゆえに「意識」に適応され、そのように空間において「意識」が表象されてしまう。このように事態に対して、ベルクソンはわれわれの生にとっての利便性においては一定程度の肯定はするが、そのような空間において表象された意識を本質と捉えることには誤謬であると批判する。われわれの生のほとんどは「外的世界から引きこもる」（DI, p. 67）ものでもないし、「純粹に個体的な生を生きる」（DI, p. 102）ものでもないので、当然意識における空間の影響を否定することはできない。ベルクソンが批判するのは、空間的表象にもとづく意識のあり方を意識の本質と捉えることが、自由を否定してしまう心理学的決定論（連合主義的心理学）や形而上学的自由の議論の前提として寄与していることである。このような空間と意識の関与において、ベルクソンは自我を空間的表象に基づく意識の「寄生的自我」（DI, p. 125）と意識本来の在り方をしている「根底的自我」（DI, p. 95）とに区別している。したがって、自由において問題になる自我とは、自由を否定してしまう前者ではなく、後者である。以上より、「自由」が問題になるのは、われわれがその有用性により大部分の生をそれによって営んでいる所の「空間」のもとづく意識のあり方（寄生的自我）ではなく、本来的な意識のあり方（根底的自我）であり、ここに「意識の証言」の正確さが問われることになる。

前節において、空間的表象にもとづく意識のあり方を實在に即したものとして捉えると自由が脅かされるという結論を得た。では、「寄生的自我」の在り方が心理学的決定論や形而上学的自由の議論という自由を脅かす議論にどのように関係しているのか、また「根底的自我」はどのようなものとして考えられるのか、といったことが問題となる。まずは前者に関してその議論を見る。形而上学的議論における決定論はともかく、（ベルクソンが心

理学的決定論であると断罪する) 連合主義の心理学や自由の形而上学的擁護がなぜ自由の否定になってしまうのか。それは両者ともに「意識を判明な、そしてそれら自体は人格とかかわりがない諸状態へと分解し、それとは別に惰性的で中立的な自我を想定する」(西山, 2013, 100 頁) からである。連合主義は、空間を媒介として自我と意識の関係を捉える。つまり、自我は意識の諸状態とは区別されたいわば「容器」であり、その中で様々な明確に区別された心理的諸状態があり、ある時点でその中の強力な動機になるある心理的状态が原因となって行為が引き起こされると考えている。また、自由の形而上学的擁護者は、行為へと至る意識の進展を一本の直線で捉え、行為の遂行の時点で複数の分岐線があるという表象にもとづく。前者は、ある時点で心理的状态の最も強いものが行為の動機として捉えるが、これは自由な行為の典型的なものとして考えられる「決断という、必然的に変化を伴う事態」(西山, 2013, 99 頁) を説明できない。決断は、そこに至るまでに熟慮という動的な心理的進展があるが、そこにおいては様々な心理的諸事象が相互に関係し、また自我と行為の双方に跨る全体である人格も同時に関与している。連合主義が考える行為の動機は、このような動的プロセスから明確に区別されて切り離されて捉えられている。このように、行為に至る過程で様々な心理的諸状態の動的関係によって導かれる決断を、心理的諸事象を明確に区別された要素として捉える連合主義は、適切に説明できない。一方、自由の擁護者が前提とする意識の進展の直線的表象は、行為が遂行された時点と複数の可能的な行為という分岐線で表現され、この可能性の存在によって行為者の自由を肯定しようとする(逆に決定論者はこの直線に分岐線を認めない)。しかし、このような表象は「行為がなされた後」(西山, 2013, 100 頁) から振り返った場合にしか意味をなさない。つまりこの直線的表象は、「為されつつある行為への心理的動的進展」を適切に表現できない「粗雑な表象主義」(DI, p. 134) 的な説明である。このような自由擁護においては、この選択を可能にする選択者を前提にしないといけませんが、この存在はこの直線的表象においてはいわば「中立的な自我」(西山, 2013, 100 頁) でしかない。以上より、連合主義者も自由の擁護者も、空間的表象にもとづく意識進展の説明という自由の否定を導くような誤った議論を行っているのである。これは、「意識の証言」としてはその有用性ゆえに一概には否定し去るものではないが、自由の適切な議論や説明においては誤謬を含むものであるということになる。したがって、意識・心理的諸事象・人格を、相互に区別されたものではなく、行為に至る動的進展において相互に不可分なものとして正確に捉える説明が自由を肯定する議論には必要なのである。

5. 「自由」とは何か—西山晃生の『試論』における「自由」解釈(3)

以上の議論をまとめると以下の様になる。

(1) 空間的表象は、われわれの（特に社会的）生にとって有用でありかつ必要不可欠なものである

(2) この空間的表象を意識に適用するのはある程度の有用性があるが、それが「自由」に関係する限り、われわれを見誤らせてしまう（心理学的決定論、自由をめぐる形而上学的議論の誤謬）。

(3) 決断のような自由行為を説明できるような意識のあり方、つまり意識の要素である心理的諸事象、意識と行為の全体である人格を適切に捉える説明が必要である。

このように、ベルクソンは「自由」を否定してしまう議論における誤謬をその根拠を暴くことで示し、「自由」の議論の方向性を示した。(1)(2)に関してはその通りであるが、(3)に関して西山は、誤解される議論として人格（の全体）を原因として行為が引き起こされるという、人格と行為を分離した見解を否定している⁽⁵⁾。(3)によれば、人格と行為は不可分なもの（として捉えられるべきもの）であり、このような見解は件の自由をめぐる議論と同様誤謬である。上述した空間的表象にもとづく意識の捉え方は、自由をめぐる議論では否定されるべきものであるが、日常でわれわれが行う、行為の原因を特定の心理状態に帰すことは、その有用性ゆえに必ずしも否定されるものではない。したがって、行為の自由が問題になるのは「例外的な重要性を有するような『重々しい状況 *circonstances solennelles*』（DI 128）」（西山, 2013, 104 頁）においてである。このような状況における行為が自我においてどのようにしてなされているのかということが自由を適切に捉えた議論になる。つまり、自由行為は「内的状態の外的現われ」（DI, p. 125）であるが、それは通常の日常生活とは異なる（いわば自己自身を全てかけるような）例外的な状況においてなされるのであり、そこにおいて「寄生的自我」とはことなる本来的な「根底的自我」が行為を遂行し、その行為において自身が表現される。これが『試論』におけるベルクソンの謂う「自由」なのである⁽⁶⁾⁽⁷⁾。

6. 時間における自由—平井靖史によるベルクソンの「自由」論(1)

前節までで『試論』における「自由」を概観した。そこでは、自由とは自己自身全てをかけるぐらいの状況において、人格全てが表現されるような行為をなすことであるということであった。しかし、一方で『試論』においては同じ事態を表す以下のような記述があ

る。

「…我々の魂の深層的諸状態、つまり数々の自由な行為によって翻訳される諸状態は、われわれの過去の歴史の総体を表現し、要約している」(DI, p. 139)

「深層的諸状態」とは、心理的諸事象が明確に区分されたものとして個別的に捉えられ、それらの単なる集合である「表層的諸状態」と異なる、意識の本来の在り方である（つまり前節までの議論における「根底的自我」を指す）。これらが自由行為によって「表現」されるわけであるが、それらは「われわれの過去の歴史の総体」であるとも言われている。つまり、外的知覚のように時々刻々と現在に現れては消えていくような（表層的）諸状態とは正反対に、今までの諸状態が（諸要素が相互外在的に明確に区別されて存在するのではなく）相互に明確に区別されずいわば「相互浸透」しながら過去の状態も含めて融合して全体を形成している。確かに『試論』において、延長を本質とする外的事物は空間における存在であり、逆に延長でない意識およびその諸事象は時間的持続の在り方を本質とするとベルクソンは二つの存在の本質を明確に区別した。外的事物は空間において並置可能であり、その意味で現在において知覚されるものであるが、このような空間的表象で意識を捉えることの欺瞞をベルクソンは主張していたのであるから、時間における存在者としての意識は、過去と密接なつながりあると考えられる。しかし、そうだとすれば過去はどのようにして意識の本来の在り方と関係しているのであろうか。この点は『試論』においては手付かずであり、その内実を独自の記憶理論と「過去存在論」という独自の形而上学的テーゼで解明しようとしたのが次の主著である『物質と記憶』である。つまり、『試論』において自由行為の重要な要素であった意識的諸状態の時間的在り方が、『物質と記憶』において記憶と過去に関する独自の形而上学的観点からの議論によってその在り方の構造解明が行われた。さらに『創造的進化』に至って、進化の様に生命現象にみられる「予見不可能な新しい」創発を自由と規定するまでに至ったのである。平井（2011）において、時間と自由の関係が検討され、その内実が生命一般の創造性である進化において検討されたのが『創造的進化』であり、そこにおいて自由は「〈予見不可能性〉」（平井，2011，1 頁）を伴う「新しさ」の創発として捉えている。具体的にその議論の概観をみる。

7. ベルクソンにおける様相概念—平井靖史によるベルクソンの「自由」論(2)

平井（2011）において、まずベルクソンの「自由」論の固有性を特徴づけるため、現代の

哲学における自由と決定論の議論との関連で検討している。そこにおいては決定論に対する自由への態度決定として、両立主義と非決定論の二つの主要な見解がある。前者は、決定論的世界観においても自由は成立しうるという立場であり、後者は決定論的世界観においては自由は成り立ちえないので、自由の肯定ために決定論を否定するという立場である。ベルクソンは「自我から、そして自我のみから発出する行為を自由と呼ぶ」(DI, p. 130)とある通り、自由を無差別な非決定性に求めることはない。となれば、両立論に近いということになるが、問題は自由行為へと至る心理的プロセスにおける進展が、決定論の様な必然的決定とどう異なるのかが問題となる。つまり、必然的ではない決定というあまり自明でない決定の在り方をどう理解するかが肝要なのである。つまり、「可能性」や「必然性」といった様相概念をベルクソンがどのように捉えているかを解明する必要がある。ベルクソンにとって可能性は、スピノザが捉えるように「自然の必然性に対する認識の欠如」(平井, 2011, 3 頁)といったものではなく、「知性による構成物」(平井, 2011, 3 頁)であり、「認識の過剰」(平井, 2011, 3 頁)に由来するものである。ただし、ここでも前述した空間的表象をめぐる議論においてと同様に、このこと自体が批判されるわけではない。可能性という様相概念は「…実在をより効果的に活用するために知性によって編み出された認識図式の一つ」(平井, 2011, 3 頁)であり、「所与の現実を拡張し仮想領域を拓く」(平井, 2011, 3 頁)という「一定の認識論的な利便性」(平井, 2011, 3 頁)があるからである。ただし、「本来は時点依存的な性格を持つ(と彼が見なす)様相概念が、時間を超脱したものと見なされる」(平井, 2011, 3 頁)というある種の錯誤があることに批判が向けられるのである。(特に可能性などの)様相概念が時点依存的であるとは、「実在的なものが可能になるのであって、可能的なものが実在的になるのではない」(PM, pp. 114-5)との主張から考えれば、可能性は事実という実在的な状態の分解・再構成によって知性が構築されたものである⁽⁸⁾。つまり、可能性に対してその都度の実在が時間的にも論理的にも先行しており、したがって、ひとたび形成された可能性(およびその総体)においては可能ではない「予見不可能な新しさ」が、その可能性の総体を超え出るものとして生成されるのである。仮に、先行する可能性が実現するとしたら、それはいわば「プログラムの実現」であり、そこでの新しさは単に「予想外 *imprévu*」(平井, 2011, 7 頁)でしかなく、予見不可能な新しさではない。さらにそこでは、時間は「名目的な仕事」(平井, 2011, 6 頁)しかしておらず、新しさの創発に何ら寄与していない。つまり、「本性上時間に依存した…様相概念が、時間を超えると詐称するとき…時間がもたらす<新しさ>、<予見不可能性>、つまり…<自由>をとらえ損なう」(平井, 2011, 5 頁)ことをベルクソンは批判するのである。

8. ベルクソンにおける「時間存在論」—平井靖史によるベルクソンの「自由」論(3)

前節では様相概念すなわち可能性は時間依存的なものであり、時間をもたらす予見不可能な新しさはこのような可能性の総体を超えて時間において創発されることを確認した。では、このような新しさが時間において創発されるとはどのようなことなのか。これが次の課題である。その解明が依拠するのがベルクソンの主張する「過去实在論」である。この主張は一見すると奇異に思われるが、その前提となっているのは『現在を占めるもの』だけが存在しているとする広い意味での現在主義(＝空間主義)存在論(平井, 2011, 8 頁)である。しかし、この主義を支える体験として例えば知覚経験などがあるが、そこにおいては再認という記憶にもとづく認識作用が深く関係していることより、過去には現在に何らかの實在的影響が働いている。また、現在から過去に影響が及ぼせないという「<過去の不可侵性>」(平井, 2011, 7 頁)からすれば、想起などの様に過去を解釈することは可能ではあるが、その際には「質的にも数的にも変わらない」(平井, 2011, 7 頁)過去そのものを要請することになる。では、現在と過去が存在するとは矛盾ではないのか。しかし、そのような批判は前者が存在し後者が存在しないという上述した現在主義的観点にもとづく存在観である。現在と過去はともに存在するが、その様相が違う。前者は「空間が満たす**現動的**な部分(平井, 2011, 8 頁, 太字強調は筆者)」として存在し、後者はいわば「**潜在的 virtuel**」に存在する。したがって現在は過去の総体からいわば「切り出され」空間において存在するものであり、生成の「動的先端」(平井, 2011, 8 頁)でしかない⁽⁹⁾。以上から、「過去实在論」は偏狭な(とベルクソンが考える)「現在主義/空間主義的存在論」による「予見不可能な新しさ」の創発の隠蔽を暴き、そのような創発の積極的根拠となるものである。

9. 記憶における<凝縮>作用—平井靖史によるベルクソンの「自由」論(4)

「過去实在論」にもとづく「予見不可能な新しさ」の創発が、時間によって生成される自由である。では、これは具体的にはどのように為されるのか。そこでベルクソンが提示する記憶の作用様態が「<凝縮 condensation, contraction>」(平井, 2011, 10 頁)である。これは、記憶の作用としては、過去の総体から特定の記憶を分解分離する「想起」とは異なり、複数の諸要素の(相互浸透的な)単一化であり、「その諸要素には含まれなかった質的相貌(異質性)を全体にもたらす」(平井, 2011, 10 頁)ものである。このような<凝縮>作用は、極小を感覚質の生成、極大を人格の生成とする幅をもったものである。前者に

においては、電磁波の波長から赤などの特定の色の感覚質が形成される際に、きわめて短いものであれ一定程度の時間幅での過去の保持が無ければならない。後者においては、その個人の「過去の全状態の現働的総合」(MM 162)として人格が形成され、それは他の個人とは異なる質的差異をもつ。このように、〈凝縮〉作用は過去に対する我々の明確な作用である想起以上に時間⁽¹⁰⁾における過去の現在への実的影響として働いており、この異質的相貌という新しさをもたらす凝縮作用の結果としての人格およびその連関としての行為が自由であると結論付けられる⁽¹¹⁾。さらに、『試論』における深刻な状況における熟慮の決断においては、そこに「積極的・意志的な関与」があることが示唆されている。以上が、平井におけるベルクソンの「自由」論である。

10. 意志と自由行為との関係—残されたベルクソン「自由」論の問題

以上において、西山・平井両氏のベルクソンの「自由」論を概観してきた。西山による『試論』の「自由」解釈によって、自我と行為の連関が、自由行為としての「決断」における自我全体の表出および稀有な重要局面という必要条件との相関で明示された。そのような自由行為のあり様をさらに時間における予見不可能な新しさの創発と示し、記憶における凝縮作用の詳述を通じて時間における意識と行為の連関をより具体的に解明し、『試論』における自由行為との関連をも示唆した。しかし、ここで示唆された「意志」は、可能な選択肢を選び取るある種の力能である「自由意志」として件の自由擁護者とともに否定したものではなかったか。平井においては生命の凝縮・緊張による「相互浸透」と意識的存在者によって強化される「相互浸透」を区別する必要性を示唆されているが、後者の相互浸透においてその強化するものとして「意志」が示唆されている(平井, 2011, 12 頁)。以上から残された問題として、凝縮作用によって推進されるわれわれの(内的)生による自由行為に「意志」は関与するのか、もしそうであるならば、そのような「意志」とはどのようなものか。今後の検討課題である。

註

(1) 本稿におけるベルクソンの『試論』『物質と記憶』『創造的進化』『思考と動くもの』は、その引用の際には慣例に従い DI, MM, EC, PM と表記する。また訳語に関しては『意識に直接与えられたものについての試論』(合田正人・平井靖史 訳、筑摩書房、2002 年)『物質と記憶』(合田正人・松本力 訳、筑摩書房、2007 年)『創造的進化』(合田正人・松井久 訳、筑摩書房、2010 年)『思考と動くもの』(河野与一 訳、岩波書店、1998 年)を適宜参照した。

(2) 西山 (2013, 92 頁)。また DI, p112, 129, 131, 163。

(3) ベルクソンは自身の哲学(=形而上学)を「実証的形而上学」と呼び、従来の形而上学との差異を強調している。

(4) 『試論』の議論を「心理学的水準」と特徴づけるのは、西山 (2012, 66 頁) においても妥当であると考えられる。そこでは、『試論』が書かれる前年の講義と推察される『講義録』での心理学に関する講義の記述が引かれている。心身問題といった形而上学的議論は暫定的に不問に付すという注意が為されている。

(5) その代表例として西山は黒田亘 (1992, 87 頁) の議論を引用している。

(6) ただし西山は結論において、このような自由行為が行われるのは「いつ」か、という「時宜性」(西山, 2013, 105 頁) への考察が『試論』以降の著作検討を通じて必要であることを付言している。

(7) 平光 (2013) は、直観を「自己による自己自身の人格との共感」(平光, 2013, 13 頁) と定義し、この実例として「寄生的自我」から「根底的自我」への再帰すなわち自由行為を実例として『試論』から引用している。「自由に行なうこと、それは自己を再び取り戻すことであり、純粋持続に自らを置き直すことである」(DI, p151)

(8) 平井 (2011) は、このような知性による可能性の構築を、『論考』のウイトゲンシュタインの原子論的論理主義を参考にして説明している (平井, 2011, 4 頁)。

(9) したがって、『試論』において批判されていた「時間の空間的表象」批判は、より積極的な根拠を得ることになる。『試論』における批判の根拠は時間的存在である意識の実情を捉えられていないということであったが、『物質と記憶』においては「予見不可能な新しさ」の創発という自由のより積極的な性格を見誤ることへの断罪への根拠となるからである。詳細は平井 (2011, 8-9 頁)。

(10) 想起と凝縮は相互排他的なものではなく、前者にも時間的にも論理的にも先行するものとしてこの凝縮を捉えることの可能性については平井 (2013) に詳しい。

(11) このような凝縮作用の結果として人格形成に関しては平光 (2013, 18-21 頁) にドゥルーズのベルクソン解釈を踏まえた同様の議論がある。さらに、平光 (2013, 21-3 頁) はこのような人格形成の推力を、過去の総体の生命の歴史までへの拡張において捉えられる限りでのエラン・ヴィタル (élan vital) と解釈している。

文献

Bergson, H. (1889). *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, 2007.

—— (1896). *Matière et mémoire*, PUF, 2012.

—— (1934). *La pensée et le mouvant*, PUF, 1998.

黒田亘 (1992). 『行為と規範』, 勁草書房

西山晃生 (2012). 「ベルクソンにおける意識と身体: 『意識の直接与件に関する試論』第一章を中心に」, 『エティカ』, 慶應義塾大学倫理学会, 第 5 号, 63-79 頁.

—— (2013). 「ベルクソンにおける自由の諸問題」, 『エティカ』, 慶應義塾大学倫理学会, 第 6 号, 91-107 頁.

平井靖史 (2011). 「自由にとって時間とは何か—ベルクソンにおける可能性なき自由について」, 『西日本哲学会年報』, 西日本哲学会, 第 19 号, 161-186 頁.

—— (2013). 「<感情>と<意志>のあいだ—ベルクソンの時間心理学における凝縮・拡張のダイナミクス」, 発表原稿 (2013 年, 3 月 31 日, 第 32 回ベルクソン哲学研究会, 於京都大学). Retrieved July 31, 2016, from <https://hiraiya.wordpress.com/%e6%a5%ad%e7%b8%be%e4%b8%80%e8%a6%a7/>

平光哲郎 (2013). 「ベルクソンにおける直観を構成するものとしての人格について」, 『メタフシカ』, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, 第 44 号, 13-27 頁.

[京都大学大学院修士課程・哲学]